
夜に唄う

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜に唄う

【Nコード】

N8749B

【作者名】

” 太った猫 ”

【あらすじ】

こことは違う世界で暮らす一人の魔物の物語、魔物達が跳梁した時代は過ぎ去り、今は人間たちの時代だ。

赤い髪のマリア | Maria in the Dark | (前書き)

英訳は適当です。これは特定の宗教を否定する文章ではありません。
ん。

赤い髪のマリア I Maria in the Dark I

私の名はマリア。私が生まれ落ちた日が、かの有名な聖母様の生誕日^{いたんぴ}というだけでつけられた安直で愚直な名前ではあるが、気に入ってはいる。

紫煙^{しえん}をくゆらせ、ゆっくりと風の臭いを嗅ぐ、その極彩色の臭いの中で目当ての臭いがしないかをたゆたってみる。今日の食事はなににしようか、考えてみれば最近、ろくなものを食べていない。

「よう、マリアちゃん。今夜あたりはオレあたりとどう？」なじみの肉屋の店主^{おやじ}が、冗談に聞こえるようにそう言うのに、私は片手を挙げて応じてやっただけだった。

娼婦^{コト}という仕事をしてはいるが、それは私が生きていく為に最低限必要な行為^{コト}だからだ。それに、そう簡単に身体を許しては高級娼婦^{たしたち}の価値が下がってしまう。

＊

そこには既になじみが何人かいた。目だけで挨拶を交わす。その内の一人、確かマーシャとかいう名だったかは好意的な視線を返してくれたが、残りは非友好的な視線^{いちべつ}をくれただけだった。中にはあからさまな舌打ちを残して夜の居場所を変える者もいた。

パーソナル・フォン スイッチ
携帯電話の電源は切つてある。今夜は自分の好みで相手^{きやく}を選びたかった。

私が、うんざりしながらちようど二桁目の客をあしらっていると、^{そいつは}その臭いは、唐突にやって来た。そいつは夜という空間には

ごくありふれた臭い^{もの}ではあるが、そいつとそいつとの決定的な違いを私は知っている。魔物^{やつら}に襲われた死者^{もの}の臭いだ。ため息を一つ、私は駆けだしていた。

＊

その死体^{そいつは}は、とてつもなく下品な食べ残しだった。魔物にだって食事のマナーというものはある。こんなにもつたいない食べ方をするなんて、なんて下品な奴なのだ。その生命に感謝の気持ちを忘れずにその髪の毛の一本^{ひとすじ}に至るまで己の血肉^{けつにく}にすべきだろうに、まったく最近の若い魔物^{わかもの}は礼儀を知らないやつが多すぎる。

私の影が、私を襲う。

が、その揺らぎは一瞬で収まった。”影に潜むもの”は私の影に牙を突き立てたまま、私の影に喰われていった。影^{そこ}にいたのは低級な魔物の一種だ。ハイエナはハイエナらしくしていれば良いものを欲を掻く^かからだ。…また、ろくでもないものを食べてしまった。

舌打ちを一つ、立ち去ろうとして、違和感が私の足をその場に縫^ぬい止めた。”影に潜むもの^{ハイエナども}”がいたからには脅威は去ったと思って良いだろう。『世界”は巨大な一枚の記憶装置^{ディスク}だ。私はその事を識^しっている』散文的な呪文を一つ、私は地面^{そこ}に手をつくとき、その場に染みついたばかりの記憶^{メモリー}を読み出した。

殺戮は一方的で容赦がなかった。が、それはけっして私達がやるようなやり方ではない、魔族も人と同じでいろいろだし、一概には言えないが、その殺り方^やはとても不自然だった。ただ殺るといいうだけなら、それはとても非合理で、楽しみで殺^やったとしても、この過程はちよつと金属的すぎる。…しかし、困った事に私はそういう殺^や

り方をする例を知っていた。

私は携帯電話パーソナル・フォンを取り出し警察に通報してやった。こちらの後始末は人間社会にんげんの仕事だ。担当の係官がなにやらないのを携帯電話パーソナル・フォンごと折り畳み、その場を後にした。

社交性の赤 I Society Red I

高層ビルとよばれる建築物から眼下に広がる深い夜の谷間を見下ろし、私は物思いに耽る。

現代は人間達の時代だ。かつては、魔物達が跳梁跋扈した甘美な時代があったが、それも過去の時代だ。結局のところ、個々の能力よりも群体としての能力に秀でた人間達が勝ち残ったというわけだ。

そして私たちはそのおぼれに預かって生きているというのが現代の構図だ。老人達にはそれを屈辱と思う輩の方が多く、慣れることさえできたなら、それほど悪い現状でもない。

＊

グラスの中、先ほど拝借してきた紅い液体にタバスコとニコチンを大量に、それが私の嗜好だ。

享楽の名は社交性の赤、魔物達が人間の世界に潜む為には必要なものだ。私達の誰もが持つ”血の衝動”を薄め、存在を隠し、この世界から狩り出されないようにする為に不可欠なものだ。

それゆえにコイツは自嘲と侮蔑をこめてNasty Bloodとも呼ばれる。この薬が製造された理由は単純明快、人と魔物が平和裡に共存する為に製造された。というならば素敵な話だが、現実にはもっとdrasticだ。つまり争いは無価値、利用できる者は最大限利用する、それが何であっても、という事だ。いやはや人間達の活力には脱帽する。グラスの中身を一口、その喉越しに嚥下される液体の微妙な味わいの中にそいつは居た。

グラスに映ったそいつは執事という固有名詞が服を被^きた見本とも
いふべき態度でその中に居た。発せられた言葉は二つ、その似姿に
相応^{しやうしやう}しい声色で、「この件は貴女に」と密やかに、「相手^{てき}の名は百^オ
面相^{しやうしやう}の貴婦人、伸ばされた腕の名は東方正教十字会」と厳かに。

ため息を一つ、私は宙に放り投げたグラスの中の銀髪の執事に一
瞥^{よる}もくれず、闇^{たにま}の静寂の中へと跳躍^{ひしやう}した。

真夜中の掟 | The Style of Monsters |

地下という閉鎖空間は私を不愉快にする。が、ここが奴らのねぐらと言われれば黙して歩くしかない。やれやれ、だ。

しかし、悪い事ばかりでもない。痕跡として、あの微かな臭いが奴の存在を裏付ける。機械化妖魔特有の臭いだ。

ソサイエティ・レッド
カーテンズ・レッド
社交性の赤とはつまり遮光性の赤だ。こいつのおかげで私達は血の衝動を抑え込み、陽の光の中に歩み出すことができる。だが、利点ばかりというわけでもない。こいつの多量服用は人間達に都合の良い副作用を生み出す、それが自己存在の喪失。そして自我を失った魔物は他の物質との融合能力を高める。そしてそれを有効利用しない手はない。自己を見失った魔物に新たな意志を植え付け、自分達に都合の良い道具として作製する。機械化妖魔の誕生というわけだ。そいつらが生み出された理由は単純明快、殺し合いは魔物同士でとそういうわけだ。

「！」

攻撃は予想の範囲内だったが、その速度が尋常ではなかった。敵の身体に備え付けられた銃弾の弾着よりも速く奴の攻撃が私を切り裂く、この狭い空間の全てを足場にし、その四本脚の黒い獣は私を中心にした放射状の斬線を描く、

弾着、私の身体の中に無数の弾丸が無造作につつまれ、私が地下道の中を吹き飛んだという幻影を残視、無造作に突き込まれた鉛弾を取り込み、影と自分を入れ替え、その場に悠然と佇む。

「我が名はマリア、闇の母マリア」流儀に則り名乗るが、反応は当然のようにない。やれやれ、だ。鬼火のような眼光の中、その攻撃衝動の裏で別の冷たい演算がその機械化された知性で行われているはずだ。そいつがはじき出す動きには無駄が無い。

あの場所で見ただ殺戮方法に一致する。そこには血の衝動に導かれる歓喜も渴望も、敵を自分の前にひれ伏せるといふ歪んだ快楽とは全く無縁の意識が働いている。やれやれ、だ。

次の一手はレーザーの射出、だが、その光条が私を貫く事はない。さすがに光速を超える事は不可能だが、それを制御する照射筒の動きを察知するのは容易、その描く射線軸と身体とを入れ替え、煙草に着火「炎よ!」、特殊音声と光の残滓により描かれた魔法陣の術式に従い簡易呪文が起動、爆散、現出した炎は無軌道な軌跡を描き炎幕を張って敵に肉薄、煙と急激な熱による空間の歪みでさらに打ち出されるレーザー光を無効化、急激な状況変化に対応するまでの数秒の間に敵性体に肉薄、ごちそうしてくれた鉛の弾丸の一部を彼に当てた手のひらを通じ返却、

その黒い犬に似た獣は弓なりになって吹き飛び、壁に激突する、寸前、三本になった足を器用に利用し危なげなく着地、埋め込まれた機銃を放棄、跳翔し肉薄、その開かれた口腔内の牙が私に突き立てられる寸前、その口の中に先程の煙草を放る、舌先と牙とで器用に描いた刻印が無事効果を発し、奴の体内を侵食、無言の苦鳴をあげて奴がくずおれる。

煙草をくわえ直し、一服、今度はゆっくりと高等魔術式を起動、精神界で高速演算処理された特殊数式の応答を現実化、「その魂よ、安らかなれ、浄化の炎!」蒼炎が現出、その肉体を悲鳴もろとも呑み込み、その存在を根底から消し去る。

百面相の貴婦人

l Ladies and Gentleman

”百面相オークシヨonz・ハウスの貴婦人”、それが敵の名だ、いや魔物われわれを狩る悪意の総称だ。主催者の名不明、構成メンバー不明、強いて言うなら私達に牙を向ける悪意の集合体、それが百面相オークシヨonz・ハウスの貴婦人だ。

「我々の中に潜む悪魔どもに鉄槌を！」と書かれた募金箱に冗談のつもりで硬貨を数枚投げ入れるがいい。その行為は現実の悪意の牙となって確実に私達に降り注ぐ、言うなればそれはそのシステムの名だ。

人間という群体の驚異的な所はつまりそういうところだ。その群体としての嗅覚は的確に自分たちの中に入った異物を確実に見抜きだし、そしてそれを排除しようとする。自分達の中に異物を同化しようとする意志が社交性ソサイエティ・レッドの赤を生み出し、その異物を排除しようとする意志が百面相オークシヨonz・ハウスの貴婦人を産み出した。

それもこれも人間が律法を破れる者だから可能となった事だ。例えば、人間ひとの身体は空を飛ぶようには造られていない。例えば、人間の肺は水の中で呼吸するように造られてはいない。しかし彼らはそれらを制限付きとはいえ可能にした。神の造った律りつを破ることを唯一許された創造物いきものなのだ、人間は！！

それに比べて私たちは頑かたくななまでに神の造った律法ほうを遵守じゆんしゆせざるをえない哀れな生き物だ。

「血の矜持ソサイエティ・レッドの為に社交性の赤に手も出せず。古に刻み込まれた血の衝動ほんのうにも逆らえず、あげくの果てには人間に利用されるか、やれや

れ、
だ」

律法を破る者 ― The Law ―

「畏とわかって出てくるとは思わなんだが、レーザーすら避けるか…」深々とした嘆息をつきながら一人の老人が、坑道の中にその姿を現す。

「それは心外だな、ヨシユア。律を破る創造物^{いさまもの}とはお前達のことだろう」彼女も呆れたような苦笑を浮かべながらその老人を見返す。

「『堕ちた同胞^{もの}の始末は同じ領域に住むの者の役目』と言うわけか…」

「わかっているじゃないか、私達の流儀を、では当然のこの私達の流儀に合わせてくれるんだろうな、牙には牙の返礼をもって返す！」

「その言葉、そのままそっくりとお主にかえす。十字砲火^{クロス・ファイア}！！」老人の声に応えて、十字型の砲筒を示す機銃を構えた教化兵^{きょうかへい}が彼女を中心とした十字隊列を組み、発砲^{ファイア}

「堕落の十字架^{アンチ・クロス}」対する彼女は踊るようにして四方に逆十字を描き魔法障壁を構築、彼女の支配空間と銃弾の壁の間に魔力の拮抗を示す青白い火花が乱流し、その火花に触れた数名の教化兵が飛散、その十字隊列の穴を後続の教化兵が淡々として埋めてゆく。

「同じ芸の繰り返しで倒せるほど、甘くは無い」再度、魔力障壁と銃弾の応酬が繰り返され、そこにはいつの間にか煙草^{シガレット}をくわえた彼女が変わらず佇んでいた。

「それぐらいで倒されてくれるぐらいなら互いの名など覚えてはおらんよ、マリア、第二の十字架^{セカンド・クロス}、詠唱開始^{セカンド・クロス}」声と共に銃器を構える教化兵^{きょうかへい}達の詠唱が始まり、その唱和効果^{ハウリング}で、撃ち出される銃弾が神聖化、撃ち出される銃弾そのものが十字形となり、じりじりと彼女

の支配空間を浸食してゆく。

「Re^{リ・バース}Birth」私は自分の能力を展開、ぐちゅりという産声を上げて私の可愛い子供達が活動を開始する。それは、ひゅおおおという風切り音を立てて、一人目の体内を通り抜け、次々と生まれ変わった銃弾達が跳躍し教化兵を駆逐していく。

”産み直し”というのが私の能力だ。自身の体内を通過した無機物に生命を与え、それを文字通り私に都合の良いように生まれ変わらせる。

聖然として彼女に迫っていた銃弾はその聖性を失くし彼女の周りに散逸する。戦いの趨勢が彼女の側に傾きかけ、「引け」見事なほどのタイミングで老人の号令のもと奇妙な程の統率感をもって彼らは整然とそこから姿を消す。

そして、彼が消えたあと、坑道を一つの砲身と見なして放たれた弾丸達は確実に彼女を貫く、かのように見えた中で彼女は自身の能力を再度展開、体内にめり込んだ異物を産み直し、生み出した凶器へと方向性を与えようとし、たところで逆方向からの銃弾が弾着、体内で生まれ直す寸前まで行っていた物体はその方向性を見失い、与えられた凶暴性のまま彼女の中で縦横無尽に暴れ回る。獣声に近い悲鳴をあげ、くずれ落ちた彼女の身体からこれまでに打ち込まれたのと同じ数だけの弾丸が飛び出し、まだ息のあった不幸な数名までもがその凶暴性を増した弾丸に斃^{たお}れる。

「だてに貴様と何度も戦^やりおうとるわけではない」その中に老人の声が陰として響く

「やれやれ、つきあいながいというのも困ったものだ」どうやら、

私もここまでらしい。打ち込まれた鉛弾の中にはご丁寧にたつぷりと銀が詰め込まれていた。煙草に火をつけ、ため息を一つ、そして私は奈落の底へと落ちていった。

暗闇の底で | In The Nightmare |

「ありきたりすぎてつまらない展開、だ」目覚めは最悪よりは少しはましだった。たとえ裸に剥かれ、両手両足と首に呪文の刻まれた呪力環^{リング}を填められていようが自我があるという事は最悪よりは、少しはましというものだ。

殺風景な部屋だった。形は私が居る場所を中心とした円環^{えん}、その四方に配置された扉の印章によって、この部屋は上下方向の広さを持たせられ、球を、すなわち閉じられたこの世界を表している。空間に封じ込まれた複雑な魔術式を読みとる。やれやれ、いつの世も行き着くところは同じか、この魔術式は

「「神の喚起」」

空間に私と老人の二つの声が反響し、それとともに、印章の記された扉を割るようにして四つ、鎧の塊が現れる。

「貴様には四聖隊^{このものたち}と闘ってもらう」その声が終わる前に、現れ出た四人は身に纏う鎧の重厚さを感じられぬ素早さで私に殺到する。

大男の大鎚が振り下ろされ、危うく避けた所に瘦身の男の槍刃が幾重にも突き込まれる。その槍刃の間を縫うようにして舞うように剣閃が突き込まれ、しまったと思ったときには私の左手は宙を舞い、ただ一人動かぬ女的手中に収まっていた。

「灰は灰に^{アッシュ}」自身の離れた肉体に意志を通す間もなく、女の振るう短剣の一薙ぎは私の左手を灰燼と化した。

「どんな奇術トリックを使った。ヨシユア」私は呆れながら問うた。その一連の動きは達人同士の連携というレベルすら超え、一つの生物器官にすら達している。

「さすがにもう気づいたか、百足むかでの脚。と、そういえば理解してもらえるかな」老人その声には種を暴かれた手品師の焦りもなく、事実のみを淡々と告げた。

「なるほど、死角の無い連係攻撃の種は、動かす脳あたまが一つ、というわけか」

「それだけではない、三点を基準とした攻撃の軌跡により多面的な召還陣を空間に描記、それによる高次元の仮想構築、そこに神の威を導き魔を滅ぼす最上の布陣」

「なるほど、な」私は再生しない左手を見ながら今日、何度目かわからないため息をつく。

＊

深淵、たゆたう、それは自らの伸ばされた触手の一部に違和感が生まれたのを知覚した。人ならざる者のその感覚をあえて人の感覚にたとえるならばそれは不快感、だったろうか、断続的にその触手の抱える球あわから漏れ出るその痒みをそれは、煩わしいと認識した。

だが、そこに自身を伸ばすには、その亀裂はあまりにも狭苦しく不出来だった。そこでそれはいつも通り、その狭苦しい穴に自身の一部を送り込む事にした。

＊

「神による魔物まいうの一切の浄化、それが我々の望みだ。その呪力環リングは

この闘いを魔力に変化しそれを天上に放出、その魔力砲^{カノン}によってこの世界に亀裂を生じ、神の進入孔を造りあげる」

「やれやれ、だな」奴の一言、一言のうちに、左手の肘から先が、右足首が宙を舞い、短剣を持つ女の「灰^{アッシュ}へ」の呪詞^{こじば}とともに灰燼と化する。

頼みもしない老人^{やっ}の長口舌は神という存在に私を捧げるための祝詞^{りと}だ。

私の自由は奪われ、この魔術式の最後の部品として丁寧^{シガリロ}に丁寧に斬り刻まれる。いつものように煙草^{シガリロ}をくわえようとして、舌打ちをひとつ、まったく、やれやれ、だ。

時震^{じしん}の兆候に気づいたのは当然ながら私の方が先だった。「ヨシユア、悪いことは言わない、これ以上はやめておけ」無駄だと思いながらも忠告だけはしてやった。が、「命乞いならもう少し気の利いたものにするのだな」それに対する返答はほぼ予想通りだった。

神の眷属がこの世界に割って入る時に生じる時震^{それ}、が始まると同時に四聖隊の動きが急加速した。そして、その身に青白い炎が陽炎のように立ち上る。聖域、つまり神の眷属がここに存在するための力場が彼らを浸食し始めたのだ。

そして、それは受肉した。

そいつは、肉の塊に見えた。奇怪な顔がオブジェのように浮かんでは消える。そして私達の脳をまさぐり高次元な存在がこの次元で活動するために無理矢理に自分の身体を折り畳む。

「なんだこいつは」その醜惡な様子に彼が叫んだ。思わず私は苦笑する。

「なんだとはご挨拶だね、あれがお前達の言う神とやらさ、正確にはその一部だが…、私達は監視者ウオッチャーと呼んでいる。

『神はあらゆる者の似姿をもち、この世界に顕現する』貴様らの持つ聖なる書の御言葉通りという訳さ」

大源より伸ばされたそいつは、この次元で存在する為に我々の中イマジネーションに在る想像力と言う名の器グラスを必要とする。

器に満たされる液体の名は絶望。そいつは速やかに死に至る病を引き起こす。

そいつは魔法陣の中心で脈打つように膨張し、それ以上の成長が望めない事を理解すると代わりに己自身から肉の触手を伸ばし出す。

そして異常に気づいた聖徒達がこの部屋になだれ込むが、有効な打撃を与える間も無く己自身の絶望に喰われ、茫然自失と化したところでその触手に捉えられ血煙と化する。

その様はまるでその身から血を吹き出し続ける醜惡な心臓のオブジェ。そうして、四聖隊さえもが血煙と化した。

しかし、その中で幸いな事は、私が人間かれらの血を浴びた事だ。神やつの被造物たる私達がそれに抗するのに必要な、律法を破る者たちの血を！！

りそれが、実、真実だと言うのなら、なぜお前はそこに立つ事ができるといふのだ！」

再度、苦笑「簡単なことさ、社交性の赤(Nasty Blood)、つまり、神の律法くびきから逃れる方法があるという事さ」

” Singing in the Dark (私は 夜に 唄い)、Vanishing under the Sun (日の光のもとに滅びゆく)” 打ち捨てられた聖徒の銃をとり、その持つ聖性に身を焦がされる中、彼女は唄う。その皮膚は爛れ、頭蓋骨とうがいこつが見え、聖性を多大に浴びたその身は骨だけになってゆく、それでも狂乱するかにように引き金を絞り続けるその姿はまさに魔物と呼ぶにふさわしい。乾いた金属音を立て、彼女の手から銃が滑り落ちる。そうして彼女は神の断片にその存在の全てを喰われた。

「はは、ははははは、やはり、やはり、そうなのだ」 狂ったような哄笑、その事実、彼女の語るその真実は、彼の人生を、生きてきた年月のすべてを、神に捧げた人生の、そのすべての否定。

それが、老人の見た絶望、両手を広げ、迎え入れるようにして、それを待ち受ける。彼女の言葉を証明するかのように、それは彼を守るように立ちふさがる信徒達をも飲み込み、彼のもとへと迫り来る。穏やかともいえる微笑みで、彼はそれを、自身の絶望を受け入れた。

＊

私はそこで正気を取り戻した。これが真実だ。神聖に浄化おかされた私達は神の源もとへと還る。

しかし私が還元される事はない。その私を私という存在としてこの大元から切り離すその源は、皮肉な事にやつら律法を破る者、人

間達の血。だからこそ神はこの不秩序ふでぎな世界を壊したがっている。

そして、私は目的のものをみつけた。それが私が喰われた理由、神の断片を滅ぼすのに必要な武器ちから「預けていたものを返してもらどうぞ」言っただけ私はかつて自身の一部であった武器を取り戻す。それは神が私に与えたもうた魔砲、私の真実の名、それを大源に通じる奴から奪い返す。

「我が真名カノン（な）は　一魔砲」力ある言葉により私は原初の武器を取り戻す。

その姿は右肩から巨大な砲塔を下げた異形、そこから彼女を侵すようにして無数の触手が彼女を縦横に貫く。

その魔砲に自身と一緒に取り込まれた呪力環を直列に接続、律法を破る人間達の血を弾丸とし、刻み込まれた魔術式を反転リバーズさせる。

「御元イエエイメエエンへと還れっ！！！」放たれたその一撃は、神の断片の結合をずたずたに引き裂き、結果、その存在自体を押しつぶした。

月華 Ⅰ In The Moon Light Ⅰ

「…ReBirth」言って私は、神の断片から取り出したもう一つのモノを吐き出す。神の意のままにその被造物を産み直す。それが本来の能力だ。

「どうだね真実を知った気分は」神の残骸の中に倒れ伏す、それに向かつて私は言葉を投げつける。

「…我々、人間を神の造りし鑄型にはめ直し産み直す装置、それがお前だと、お前達、魔族だというのか」呆然自失という呈で老人が呟く。

「真実、それが真実だ。見たのだろう。神の断片の中で、その世界を、神の抱える数多の世界の中を…」はここにわ煙草シガレットを銜え紫煙を吐き出し、私はその問いに答える。

「だからこそ、私達は人を襲い、そして喰らう。しかし貴様らの中に流れる血がそれをさせない。神の律法を破る者達の血がそれをさせない。だからこそ、私達は目覚め、そしてお前も元のままといいわけだ」そしてそれこそが私が無機物しか意のままに産み直せない理由でもある。

「…なぜだ、ならばなぜ、お前はそこに立つ。貴様らが、真実そのような存在だというのなら、神の喚起とともに引き起こされる我らの滅びと神への回帰こそ、お前達の望みではないのか」

「ああ、その答えはとてもとても簡単な事だ。私達はお前達のつくる、この不出来で愚かな世界をととてもとても愛しているのだよ」

老人は自身の絶望を抱えたまま去りゆき、白みはじめた夜の中で
彼女は独り呟く、

「あ、あ、今夜は月が綺麗だ…」

… Singing in the Dark
Closed

月華 Ⅰ In The Moon Light Ⅰ (後書き)

この話、赤い髪のマリアの話はこれで終わりですが、こういう世界観で続きが見たいという人がいらっしやれば、お知らせ下さい。前向きに努力します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8749b/>

夜に唄う

2010年10月9日11時24分発行